

4. <創造性と研究>を求めて― 日本中世英語英文学会創立期の私―

大泉 昭夫(同志社大学名誉教授)

2002年6月16日に京都において『大泉昭夫記念論文集』の出版祝賀会が催された折に、その席での挨拶の準備に記した覚書を『新しい酒は新しい革袋へ―英語学・中世紀英語文献学への道を歩んで』と題して印刷し、参加者を含む先輩・同僚・友人の方々に配りました。その中から1節を引用します。《1965年5月3日に、同志社大学において<中世英文学研究会>第1回例会が開催されました。この会の発起人は上野直蔵(同志社大学学長)、広瀬捨三(関西大学教授)、御興員三(京都大学教授)、吉田新吾(大阪市立大学教授)の4氏で新進気鋭の斎藤勇(同志社大学助教授)氏が事務局役でありました。この会は1984年11月25日に京都大学で開催された第40回例会で閉じましたが、私自身にとって貴重な勉強の場を与えていただいたこととなります。第2回例会(1965年10月京都大学)においては、成瀬正幾氏の司会による『MEDをめぐって』と題するシンポジウムに発表者として参加し、第40回例会(1984年11月京都大学)において『中期英語研究の展望と課題』と題するシンポジウムの司会を務めさせていただきました。この中世英文学研究会が縁となり、上野直蔵・斎藤勇両先生のご尽力で同志社大学への道を拓いていただいたのです。》

私が30歳のときに創立され、20年間活動し続けた中世英文学研究会は《中世紀英語文献学への道>そのものでした。創立当初より、研究会の中心メンバーとして支えて下さった佐々部英男(京都大学名誉教授)氏の編まれた『中世英文学研究会の歩み―研究発表・シンポジウムに発表者とテーマ』と題する冊子は貴重な記録です。これを補足するとすれば、研究会の性格は会場に象徴されていたようです。たとえば、同志社大学では、新町校舎尋真館会議室を、京都大学では学友会館を使用し、一会場の円卓方式で会を進めることが出来ました。

1984年11月25日に京都大学で開催された第40回例会において配布された「新学会の発足について」と題する印刷物が手元にあります。これを頼りに記憶を辿ると、私が新学会発足に関与したことは、学会名を<中世英文学会>から<中世英語英文学会>へ変更するよう強く要望したこと、そして東の<談話会>を代表する鈴木栄一氏と西の<研究会>を代表して事務的打ち合わせを行なったことぐらいでした。

再度、『新しい酒は新しい革袋へ』から他の1節を引用します。《最近私の念頭にあるのが、この<伝統>と<革新>という両概念のかかわりあいでしたので、これに関して2つの個人的体験を話させていただくことにします。この<伝統>と<革新>は英語で *tradition* と *innovation* であり、対で使用されることがあります。書名や論文名にも見られます。*innovation* は *creativity* と並置され、同意義あるいは相補的に用いられることがありますので、<創造性>と理解してもよいと考えます。》Silvano Arieti が *Creativity: The Magic Synthesis* (New York, 1976) において「創造性とは、これまで結びつかないと思われていた事物または考えを、結びつけることに成功したことをいう。成功とは、科学の場合は、その理論が、他の科学者の仕事に役立つことである」と定義しております。私の *creativity* とその軌を一にするものと考えます。

1976-77年のトロント大学における在外研究の一大課題は＜創造性＞を最終目標とする＜研究＞のあり方について認識を新たにすることでした。それは＜啓蒙＞を脱して＜研究＞を目指すことです。1981-82年のオックスフォード大学における在外研究から帰国後、直ちに構想したのが、1983年12月に開催した＜英語史研究者専門会議＞でした。そして、1987年10月に＜チャーサーの英語に関する研究者会議＞を、1995年11月に＜Kyoto Conference on English Historical Linguistics and Philology＞を企画・開催し、夫々の会議録を刊行することが出来ました。この研究事業・企画の直接の動機となったのは、1980年4月にトロント大学中世研究センターの後援により開催された「＜ベーオウルフ＞の製作年代推定」に関する国際会議とその議事録 Colin Chase 編 *The Dating of 'Beowulf'* (Toronto, 1981)です。

＜中世英文学研究会＞が＜中世英文学談話会＞と合体して＜日本中世英語英文学会＞へと発展したことは当然の帰結で、慶賀すべきことであります。

私個人の研究者人生において＜中世英文学研究会＞の1965年—1984年は、インドの「4住期」の思想に従えば「家住期」であり、＜日本中世英語英文学会＞創立の1985年には、「林住期」に本拠を移したことになります。[林住期には家庭が落ち着いたあと、一時的に家を出て、やりたいことをやる。飽きたり疲れたり、路銀が尽きれば、また家に帰ってくる。林住とは「林に住む」ことで、自由瞑想の時間を含むのです。]

[以上入力協力者：三木泰弘(青山学院大学非常勤講師)・和田忍(東京都立大学博士後期課程)]